

国語教育を中心とした教科横断的な学習の学習効果に関する実践的研究

名古屋市立東丘小学校 教諭

勝倉 明以

《1、研究の目的》

本研究の目的は、小学校における国語教育を中心とした教科横断的な学習を行う意義と、その効果を授業実践から明らかにすることである。

情報が溢れかえっている困難な時代を子ども達が生き抜くには、様々な情報を読み解く読解力と、それらを論理的に思考する力が必要である。このような力を育むための方法として、教科横断的な学習が挙げられる。そのためには、現行の学習指導要領で提唱されているような、国語教育を中心として言語能力を伸ばしつつ、複数の教科の連携を図りながら授業をつくるカリキュラム・マネジメントの実現が必要である。言い換えれば、国語教育に重心を置きつつ、複数教科の学習内容を活用した言語活動の充実が必要なのである。しかしながら、各教科等の教育内容を相互的に捉え、組織的に配列していく教科横断的な学習には課題もある。それは、小学校で十分機能していないことである。この要因として、具体的な実践例が多くないということと、その学習効果の明示が不十分であるということが挙げられる。そのため、複数の実践例を示して意義と効果を明示することによって、重要性が周知され、今後教育現場での取り組みが活発化していくことを目指した。

《2、実践内容》

本研究では、国語教育を軸に据えつつ、道徳・図画工作・生活科の学習と関連付けた6つの教育実践(【A】～【F】)を行った。具体的な研究の流れは、次の通りである。まず始めに教材研究を行って授業計画を立て、それに基づいて実践を行い、議論の様子等を文字起こししてデータ化した後に、その内容を分析し、どのような学習効果があったかを明らかにして研究発表や論文投稿を行うという流れで行った。

①どの教材同士を関連付けた実践を行ったのかと、②個別の実践の成果は以下の通りである。

【A】3年生：国語「わすれられないおくりもの」と道徳「大切なものはなんですか」

▶本実践では、作品の誤読を防ぐために、道徳科で命の大切さについて学習した後に、国語科の学習でデス・エデュケーションを行った。その結果、子ども達は物語の〈読み〉を自己投射させ、自分の生き方について振り返り、自分だったらどのようにするのかを考えていた。物語の読解を踏まえ、もし自分が登場人物だったら、どのようにつらく苦しい出来事を乗り越えるのかについて考え、深い議論が交わされた。このような議論を通して、精一杯生きることの大切さについて再認識する姿が見られた。

【B】3年生：国語「はっとしたことを詩に書こう」と道徳「まわりを見つめて」

▶詩は、子ども達が普段書いている文章とは異なるスタイルをもつため、苦手意識をもちやすく、小学校の国語の授業で詩の創作を行うと困難が生じやすい傾向がある。また、本実践の対象となった子ども達は初めて詩の創作を行ったため、創作意欲が低い傾向にあった。そのため、意欲的かつ創造的な学習活動を行うことが出来るように、道徳の授業と国語の授業での2度にわたる詩の鑑賞活動によって、詩というジャンルへの理解を深めた。その結果、子ども達は詩に対して複数の視点から考えるようになり、当初感じていた苦手意識が減少し、意欲的に創作できるようになったことが本実践の成果である。

【C】1年生：国語「ずうっと、ずっと、だいすきだよ」と道徳「ちいさなふとん」

「いきているって」、図画工作「おはなしからうまれたよ」

▶本実践では、主人公・ぼくと愛犬・エルフの成長・老い・死が描かれる国語科の「ずうっと、ずっと、だいすきだよ」で考えたことを活かしつつ、道徳科の「ちいさなふとん」と「いきているって」において成長と生きることについて議論し、図画工作科で読書感想画の学習を行った。その結果、1年生でも複数の要素を関連付けて考えることができ、精一杯生きようとする前向きな道徳的価値観が形成された。生きることの尊さを実感し、命の有限性に関連付け、主体性のある「生き方」を考える姿が多く見られ、実践意欲も醸成された。

【D】1年生：国語「うみへのながいたび」と道徳「シロクマのクウ」「やればできるんだ」

▶本実践では、国語の学習では写真から情報を読み取る活動を重点的に行った後、教材文の読解を行った。視覚的な情報を基盤にして読解することで国語教材の内容を正確に把握しやすくなり、道徳教育の内容と関連付けて考えやすくなることをねらいとした。その結果、ワークシートの記述からは、他教科で学んだ学習内容を活かした意見が多数見られ、最終時には積極的に意見を発表することができるようになった。議論の中では、友達の意見にも耳を傾けながら反芻し、自分の考えを更新していく様子が見られた。

【E】1年生：国語「見つけたよ、いきもののひみつ」と生活「むしのふしぎをみつけたよ」

▶本実践では、児童の実態に合わせ、強い興味関心をもつ傾向があった生活科と関連付けて国語で紹介文の執筆を行った。その結果、これまで1文程度の短文の記述が精一杯だった子どもも、1つのテーマに対して5文以上書くことが出来るようになり、長文を書くことが出来ていた子どもについては、これまで以上に意欲的に自分の思いを言語化して執筆し、文章の構成を考えて書く姿も見られた。体験・観察したものを題材としたことによって、自分の思いや考えを言語化しやすくなり、このような変化が見られた。

【F】1年生：国語「スイミー」と図画工作「アニメーション的手法を用いた鑑賞活動」

▶本実践では、挿絵やドローイングという非言語的かつ視覚的な資料について図画工作科の時間に十分考えさせた後に、文章読解を行った。資料から得たたくさんの情報を生かしながら本文を読んだことで、文章読解の理解が促進され、明確な自分の意見を持ち、書いて発表まですることが出来たのではないかと考えられる。文章読解に困難を抱える発達段階や低学力層の子どもでも、視覚的なアプローチで図画工作科教育と教科横断的に学習させることによって、読解力の有意な向上が見られることが分かった。

《3、研究成果》

本研究の対象児童は、各教科の類似点を接続させることで意欲的に学ぶようになり、複数の情報を取捨選択して思考する姿が多く見られた。ここでは、6つの実践で得られた成果を総括的に捉え、研究全体で得られた成果について述べる。主な成果は、以下の4つである。

- ① 国語教育を中心とした教科横断的な学習を行うことによって、児童の思考が深まり、多面的・多角的な「読み」や「思考」の実現が可能になること。→(【A】～【F】)
- ② 道徳科と国語科の教材の共通点に注目して教科横断的な学習を行うことで、国語教育における読解力の向上だけでなく、道徳教育でも「考え、議論する」深い学びの実現が可能になること。→(【A】～【D】)
- ③ 小学校1年生という発達段階であっても、継続的に教科横断的な学習を行っていけば、高い教育効果が得られること。→(【C】～【F】)
- ④ 十分な言語能力が発達していると言いつても難しい発達段階かつ低学力層の子どもであっても、図画工作科と関連付けて非言語的かつ視覚的なアプローチを行えば読解力が有意に向上すること。→(【F】)

《4、今後の課題》

本研究では、低・中学年の実践しかできなかつたが、高学年でもその効果の検証をしなければならない。そのため、本助成を皮切りとして、今後も継続的に研究活動を行い、低～高学年という子ども達の実態や発達段階ごとの研究成果を公表し、教育現場で教科横断的な学習が広く活用されるようにしていく。